
実験人間兵器

茶川竜之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実験人間兵器

【Nコード】

N3296Z

【作者名】

茶川竜之介

【あらすじ】

世界は変わり果てた。人、一人一人が目の前の生に必死にしがみついている。

あるとき、動物は獣へと変わり、人間への反撃を始めた。

人間が取った反撃手段。獣に対抗できる人間兵器を作った…。

実験人間兵器として、戦う一人の少年は生まれたときからある特別なプログラムがあった。

プロローグ

世界は、変わり果てた。人、一人、一人が目の前の『生きる』と言うことに必死にしがみついている。

具体的には、世界がどう変わったか・・・。

2350年代。アフリカ大陸で、猿の突然変異が発見された。が、このことは公表されずに闇へと葬られた。

5世後。各地で、動物の凶暴化、肉体の急激変化、知能の急上昇そして、動物は人類に今までの反撃とばかりに襲いかかった。

5世紀当初の人口から5世紀中盤には、五分の一に減った。

この頃、世界は一つの機関を軸に動いていた。進化した動物たちは、動物から獣と呼ばれるようになった。

獣は、銃に撃たれても、すぐに修復し、現代兵器：銃は、あまり効果がなかった。

唯一の弱点と見られているのは、背骨だった。背骨を破壊、つまり折ってしまえば良い。

しかし、背骨を折るには、人類は肉体能力が足りなかった。

そのため、機関は獣に対する、戦略核兵器を使用した。これにより、獣は減少したが放射能汚染が拡大した。

使われた核兵器の量はものすごい量としか伝えられていない。とにかく、大半の人類は放射能によって蝕まれた。

残された人類は、手を取り地上シェルターと地下シェルターを建設した。

シェルターは世界中に点在している。

その10世紀後、人類は放射能に対する耐性が出来たと言われている。10世紀後ほどから、放射線による死亡者が減ったのだ。

しかし、それは獣も同じようだった。獣への非核の対抗手段として、背骨を破壊を出来るだけの運動能力を持った人を作ることを研究。

そして、獣細胞を人に投与できるようにした、N131獣化細胞を

開発。この、細胞を投与した人は飛躍的に身体能力が上昇したが、獣化細胞に対応した体をもつ人は少ないことが分かった。また、投与の方法は、2つ。受精卵の時に仕込む方法。もう一つは、成体に注射で注入する方法。

この、N131 獣化細胞を中心とした、BP, Beast Per son 計画が全世界で始動した。

そして、僕はBP 計画始動2世紀記念で開発された。N383 獣化細胞を使用した人をアシストする為に研究された、N282 獣化細胞を胎児の頃に投与された。No, 28200001。名前は、みなど。

プロローグ（後書き）

皆様、知っている方は久々です。
知らない人は初めまして。

茶川竜之介です。

よく連載小説を途中放棄してはいますが…この作品は、冬休みマジで
気合いを入れる作品と言う事で、冬休み最終日までの連載終了を目
指して執筆します。

文才は全くないですけど、よければ、最後までお付き合い下さい。

訓練生

「以上。訓練生の授業はここまで。」

と教官が、部屋から出て行く。それと同時に、教室中の誰もが、実戦演習の為にプロテクター、対獣用刀を装備した。

僕も、もちろんながら例外になる訳でなく素早く、装備する。

みんなの波の中で、逆らう訳でもなく波に流れて行く。

演習場で整列する。

「よし。各員いるな…卒業演習を行う。この前、発表したチームで行ってもらう。」

「はっ」

「これで、卒業できるか出来ないか決まるからな…気引き締めろよ。」

と指導員が付け加え、訓練生はチームごとに散らばる。

「改めて、よろしく。」

と班長のマック・ペリー（男）がにこつと笑う。

「まあ、湊とは、よく組んでるじゃん私ら」

すこし、目つきが悪い（本人気にしてる）メリー・アンソ（女）が投擲槍を渡す。

「さんキユ。確かにね。君等なら安心できるし。」

腰と、スポンについている槍入れに納める。

「いや、しかし和夏は？」

「いるよ」

とマックのほっぺたを指で突き刺す。

「目標は、こんにやくつても、ライオン獣種が4つ。これが、突然現れるからうまく擬似背骨を折る。」

「……りょーかい」「」

とマック以外の残りで言った。

「よし。第9班！」

「はっ」

「全員だな。よし。出撃！」

教官の声と共に、僕らは地面を強く蹴った。この人蹴りでかなりの速度が出る。

チームは、常に無線で連絡しあう。

『生臭い。』

『了解。』

『どこだ？』

僕は、投擲槍を一本足から取り、背中に投げつける。擬似背骨に刺さったのを確認し

上空に飛ぶ。といっても、市街地の家の屋根に乗るだけ。

『一体処理。多分…西。』

『私が向かう。』

和夏が返答をする。

他は…。僕は、アシスタタイプなのでこういう、探知能力は高い。

『あとは…。東若干北。』

と言つて、ため息を吐く。

『確認。』

マツクの低い声が響く。

『アツなんか見つけた。』

とメリーが報告を入れた。終わりだ…これで。

「任務終了。おつかれ。」

と指導員がにこつと言う。みんなが一応感謝を述べて、座り込む。疲れた。」

と和夏がみんなの感想を言ってくれた。

正直、ここまで、訓練の範囲が広いとは思ってなかった。

「よし。全員帰投。今日は寮に帰って休め。以上」

対獣戦闘訓練所卒業式。

「諸君等は、この3年間。よく耐えた。以上！」

「よし。主席は、美作和夏。2は、マック・ペリー。3は、佐々木純。4はメリー・アンソ。…」

会場が少しざわつく。和夏に関しては主席で良いと思う。けど、多分僕はだいたい15位だったかな…。まあ自分にしてはよくやった！多分…。教官が成績優秀者20番までを言い。式が終わった。主席20番目までの僕らは、多分同じ戦場にいるだろう。

僕らを街を取り戻す為に。

「第2極東地上支部へようこそ。君たち150名には、人類を獣から守ってもらう。いや…君の愛する人を守るべき物を守る為に全力を尽くせ。」

「強襲部隊は、左。守備部隊は、真ん中。遊撃部隊は右に集合。」
僕は、なぜか強襲部隊なので、左の列に入る。そのまま、誘導され。

強襲部隊兵舎に来た。昔ながらの日本式の建物で実に趣がって…

これ、本当に、兵舎か？

「敬礼っ」

急に言われて焦りつつ敬礼をする。

急に言われて、焦りつつしつかりと敬礼をする。

「私が、第2極東地上支部強襲部隊隊長。桐山だ」と、目算30歳に満たないと思われる女性が部隊隊長。

「第1小隊は…。第3小隊は美作湊。美作和夏。マック・ペリー。

メリー・アンソ。」

一緒の隊…。波乱だ。絶対

「第3小隊の隊長。バリエだ。まあ、よろしく」とメガネをかけた若い男。

「一応、一期先輩になるかな？さちです。」

と優しい感じの少年。でも、名前はかなり有名だ。壁外訓練の時に獣との戦闘に陥り、生徒50名が死亡した事故があった。

その時に獣を2体狩ったらしい。誰よりも冷静にかつ平常に。

あの事故は学校側と、守備部隊のチェック不足だったと報告されている。

僕らの時には、本来の動物見学をできた。挨拶をして、僕らは訓練になった。隊長曰く、話しておく事と訓練はしておきたいらしい。

「対獣用刀はどのタイプだ」

「ええっと真ん中の物です。」

「そうか」

と隊長は一番左の対獣用刀を隊長は手に取り、一振りする。

「まあ、なら安心か。うちの支部では、このどちらかと言うと、この背骨を斬るタイプが主流だからな。」

「さて、適当に基本訓練させておいて、頼んだぞさち。」

と隊長はどこかへと去って行った。さちさんは、対獣用刀を2つ取り。こんにやくを切り刻んで行く。

「…。さて、んじやまず。斬り込みから。」

みんなが、こんにやくを斬って行く。しかし、斬れねえ!!!
「…。角度が良くない。」

とさちさんに、軽く指導をもらう。

言われた通りに、斬り込むとスパツと斬れた。

「…おおっ!!!」

「読み込み早いね。さて、他は…って。マツク…」

みんなが、マツクの方を見て、言葉を失った。こんにやくが、ち

ぎれているのだ。斬れている訳でなく。

さちによる、マツクの徹底指導により一応は斬れるようになりました。その後、市街地機動練習。加速練習。持久走。遠距離攻撃。を行い一日は終わった。

今日は、なぜか掃除係ということで兵舎内のぞうきん掛けをしていた。

「いやあ、平和だ。というか、太陽の下久々だ。」

「何を今更。昨日言えよ。」

とメリーが和夏を突っ込む。しかし、平和だ。獣なんか、いないみたいー。

と思った瞬間、警報音が鳴り響いた。

『全戦闘員につぐ。遊撃部隊、強襲部隊は、ただちに地下門へ集合。守備部隊は、西第45隔壁へ迎え！！』

「強襲部隊第3小隊。全員いるな。」

とバリエが指で人数を数えて言う。

「ただ今、第3小隊は欠員14名のため。遊撃部隊から14名借りている。連携は頼むぞ。それでは、今から作戦を伝える。我々は、Cブロック4区へと向かう。Dブロックに展開する隊が先発。Cが次発。Bが最終ラインだ。既に、獣の侵入が起きているらしく。最前戦には守備隊が展開している。あと、10分後には守備隊は隔壁に登り、撤退する。つまりは、隔壁を修理する為に守備隊は割かれる。我々、強襲部隊がなんとか獣からの都市への被害を軽減させる命に変えても、守るべき人は守るぞ。」

「了解。」

全員が返事をし、装備を装着する。強襲部隊用装備は初めてだ。

軽量型プロテクター。腕部プロテクター。対獣用刀。対獣用投擲槍。投擲爆弾。…。

最後の投擲爆弾は装備しなくても良いらしいが。

強襲部隊の服装は、パーカーに半カーゴパンツ（槍容れ付）多機能タイツ、軽量スパイク。他の隊と比べればかなり軽いし簡素だ。全てを装備し終え。さちさんに装備チェックを行ってもらおう。

「よし。出撃。持ち場に向かうぞ。」

全員で、指定された持ち場へと向かう。既に、守備隊撤退の信号弾は上がっている。次発の隊では一番最後に現場に入ったと思う。指定された区画の一番高い建物に上る。既に前方では、建物の破壊と戦闘が行われている。

「お前。探知タイプだな。状況は？」

…。状況…。音探知がこの状況なら。目を閉じ。聴覚に意識を集中させる。

「…。東側が押されていますね。大型の獣を音がします。」「そうか…。まあ遊撃部隊が何とかしてくれるかと、隊長は後ろを見る。

この第2極東地上支部はきれいな町並みだ。今、知ったけど…。

「隊長！信号弾！」

と遊撃部隊からの貸し出し隊員が叫ぶ。

「色は、赤…。よし行くぞ。信号弾あげる緑だ。」

と隊長は飛び降りた。僕は緑の信号弾を打ち上げ。他の隊員同様、隊長を追いかけた。

ぱつと見、緑の信号弾は4つぐらい上がっている。

「敵だ」

と言う隊長の声と同時に刀を引き抜く。が

「うわああ」

「ニコン！…！」

遊撃部隊からの貸し出し隊員が食われた。既に囲まれているのだらうか？

「さち！」

「はい？」

「お前は、湊と和夏、マツクとメリーあと、2人を連れて前のやつをやれ！他は俺に続け！」

隊員は反転し、隊員を食った獣に向かう。

「さて。犬型かな？」

とさちさんは獣の前で立ち止まって言う。獣は今にも食いつきそうだ。

「なら、躡がいるよねー。」

と噛み付いてきた獣を華麗に避け、背中に乗り背骨を斬る。

「。。。さて、次は。」

「えっ。。。少し北に。」

僕は、左をみて、後悔した。

ゲボボボツボオオ。。。獣が、吐いているのだ。あれは、なんだ？人？人？こいつらが、いなければ僕らはー。投擲槍を一つ取り、獣へと接近する。

槍を、獣を目にめがけて投げる。獣の目から血が出ているのを確認すると、僕は、乗っていた建物から獣へと飛び降り、背骨へ刀を突き。。。

「あぶない！」

「避ける！湊！！」

気がつけば、体はものすごい速度で建物にぶつかった。

だけど、思ったより痛くない。体を起こすと、無線機が壊れていた。

「大丈夫か？湊」

「ああ。。。無線は派手につぶれたが。」

「ちよっと待っとけ。」

と、無線で連絡を取り合っている。装備を見直すと、軽量型プロテクターがぶつかった時、変な感じだった。

触つてみると、柔らかい。。。これで衝撃を吸収するらしい。腕部プロテクターは割れていたなので、取り外し。立ち上がる。

「行けそうか？」

「多分。まあ、分からないけど」

「んじゃ、作戦続行だ。」

マツクが、地面を蹴って、それを追いかける。刀を落としていなくてよかった本当にそう思いつつ。空を見ると、黒とか、赤の信号弾が上がっている。

「無線機がつぶれたらしいな。丁度、良い。退くぞ」

と隊長がすこしにやつき、黄色の信号弾をあげた。

補給所につくと、第3小隊はかなり減っているみたいだ。

「さち。そっちは何人やられた？」

「借り出し2人が。」

「そうか。装備を整える。刀は刃を交換してもらえ。」

僕は、無線機と、腕部プロテクターをもらい。和夏に声をかけると

「バカ！！」

「うえい??」

まさか、最初にそう言われるとは悲しいよ。

「先に死んだら殺す！」

「いや、死んでるし」

「でも、殺す。」

そんな、泣きながら言われても。

「ごめん。」

ともう一度謝る。と急に和夏はクスツと笑った。

「いつもなら私が怒られるのにね」

確かにそうだ。和夏はかなり昔から無茶をするし本当に色々あった。

…一応は、和夏とは幼馴染みである。和夏は結構な美少女なのでちよつと誇らしい。

「ちよつとこつち来て。」

さちさんと呼ばれ、

「本当にごめんね」

と、和夏にもう一言言ってさちのもとへと向かった。

「いや、生きててよかった。ホントに。どうかした？急に感情的に

なつて。」

「…。すいません。単独行動をして。」

「単独行動なんかどうでも良い。なんか、あつたのかなつて」

「まあ、色々と。」「そうか。まあ、言いたくないことは深く聞かないでおくよ。君は知ってるか分かんないけど。僕の同じ訓練学校の同級生は50人。訓練生時代に死んだ。それは知ってる？」

「…。はい」

「その事を知ってるなら、君は知ってると思うけど。僕は、訓練生が50人死んだのを目の前で見た。正直びっくりしたよ。僕の隣が一瞬にして、消えたからね。」

さちさんは、すこし、言葉を止め瓶に入った。水に口を付けた。

「食われたんだよね。10匹の獣に。その返り血が、ベチャってかかってさ。メガネが血まみれで、見えなくなつてさ。メガネをはずしたら、ぼんやりだけど、隣に居たやつの手が転がってたんだよね。その時、無茶苦茶さ焦つて。刀を抜いたんだけど、思いつきり、腕斬つてさ。力が入らないんだけど、獣に向かつたんだよ。んで、気がついたら2体斬つてた。」

そのあと、さちさんは暗い話しちゃつたねと笑つて立ち上がつて水を取りに行つた。

「壊れた隔壁は一時的に塞いらしい。あとは、獣掃討だけだ。俺等はDブロック2区の担当組に編入。獣の数は多いと聞いている気を抜くなよ」

とみんなは聞いた瞬間駆け出した。

Dブロックに入った時にはかなりの数の赤の信号弾が上がっていた。

「前に敵！」

「さっきの別れ方で俺に続け。さち探索を続ける」

「了解」

隊長の指示を聞き、さちさんは左へと向かつた。僕はそれに続き、

ひたすらさちさんを追いかける。

「マック先頭に行つて」

とさちさんは言い。僕の横に来た。僕は隊列の2番目。V字に展開して探索は行つ。基本的に、高速移動しながら。

「探索は？」

「…。15時方向に」

「マック聞いたね？」

「了解」

さらに、スピードを上げ15時方向に向かう。

「あと500M!!」

「戦闘展開。マックと俺は囿！」

とさちは言つて刀を抜いた。僕は和夏とアイコンタクトを取り、左側へと向かう。和夏は右側へ。

刀を抜く。獣はサイタイプ防御力は高いか。

「食らいついた!!」 とマックからの報告を受けて、僕は投擲爆弾を槍に付け、サイの背中に投げる。

「爆弾行きます!!」

うまく、刺さつたのを確認し。爆発を待つ。…。まだいる？

「近くに嫌な感じが」

爆発を確認し、獣へと近づく。

「猿だ!!」

…。最もめんどくさい獣か…つて、猿がこつち目掛けて、飛び込んでくる。

僕は、槍を素早くなげ、自分も、猿へと飛び込む。猿はギリギリで、槍を避け奇声を上げ距離を縮めてくる。

「キエエエイ!!」

とこつちも声を上げながら僕は猿へと、刀を一振り。なんと、腕を切り落とせたが、全く効果はない

「ウキイ!きい!!」

いや、うるさくなった。

「ゲベエエ！！つーか死ねええいいいい！！」

とメリーに聞いた通りに、正面から骨を狙う。正面から飛び加速すると、相手も正面から来た。当たる瞬間に僕は槍をとり、猿にさす。さるはかまわずに長くのびた爪で切り裂きにくるが猿の急所でもあるう股間を蹴り上げる。そして、落ちてきた所に背骨を斬った。

「猿を処理……。」

「サイトタイプはやった。また探索展開で行くぞ。」

「了解」

対獣用刀に付いた血を払い、さち、マック、メリー、和夏を追いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296z/>

実験人間兵器

2011年12月11日13時49分発行